



## 「紫陽花に 雫あつめて 朝日かな」

加賀千代女

紫陽花が美しく咲き誇る季節です。雨の日も家の中ばかりでなく、外に出て色とりどりの花たちをながめてみませんか。



## 「ほめて育てる」について考える

今は、家庭教育でも学校教育の場でも「ほめる教育」が推奨されています。

本当に「ほめる教育」で子どもの中に、自己肯定感が育ち、困難なことに立ち向かったり、様々なことに挑戦したりすることができる子どもに育つのでしょうか？

・ほめ言葉を行動を起こす動機づけにしてしまうと、子どもはほめてもらうために行動を起こすようになり、ほめてくれる人がいないところではやる気になれません。あるいはやったのにほめてもらわないと一人で傷つき、前進する気力を失います。ほめる子育てに頼っていると、子どもの中に本来の自己肯定感を育てることはできません。本来の「自分はこれだ」「この自分が好き」という無条件の存在肯定ではなく、ほかの人がどう思うかによって自分の価値を決める、自信のない人間に育ってしまいます。ほめてもらえるかどうか気になって、不安や緊張にしばられた毎日を生きることになりかねません。大きくなっても常に自分をほめてくれる人を求め、ほめてもらわないと自分が大丈夫なのかどうかを自分で決められない、不安定な心のもち主になってしまう可能性もあるのです。

「子どもの心のコーチング」 菅原裕子 PHP文庫

・「ほめて育てる」「叱らない子育て」というのは、親がラクをすることには貢献しても子どものためにはならない。ほめて育てれば自己肯定感が高まると言われてきたが実際は低下の一途をたどっており、傷つきやすい若者、我慢できない若者、頑張れない若者が世の中にあふれるようになっている。

・今流行りの「傷つけない教育」子育てでは傷つきやすい人間が生み出されていく。子どもを傷つけないように気をつかうばかりで厳しいことを言わない子育てや教育では、子どものレジリエンス（諦めない心）が鍛えられない。実際、傷つきやすい若者が増えていることは、学校や職場で多くの人が感じているはずだ。ダメなことはダメときっぱり伝え、わがままや規則違反が通用しないことを毅然として示す厳しさの中で、子どもの心は鍛えられていく。今強く求められるのは、「傷つけない」子育てではなく、「傷つきにくい心に鍛える」子育てであり、教育であろう。

「伸びる子どもは〇〇がすごい」 榎本博明 日本経済新聞出版社

やたらほめるだけではなく、してはいけないことをした時（わがままや規則違反など）には、叱ることにより子どもに行動規範が育つのだと思います。

上手にほめ、上手に叱る、このことはなかなか難しいことです。ほめる時にはできたことをほめるのではなく、その過程の努力をほめてやることです。また叱るときには、ただ感情的に叱るのではなく、叱る理由をきちんと理解させることが大切です。

ほめること、叱ることで最も大事なことは「あなたのことを愛している、大切にしているのよ」という気持ちが根本にあることで、より子どもの心に響くのです。